

42195

教科書文庫

4
815
42-1923
20000 41746

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

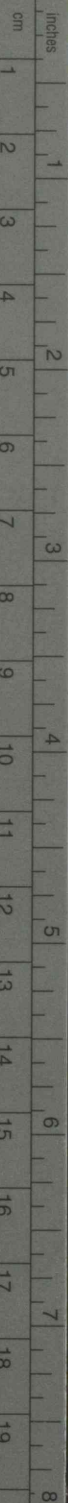


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



42
200

3759
Kan
資料室

女子
法文本日代現

所輯編館成開

纂編

版藏館成開京東



資料室

教科書文庫

4

815

42-1923

2000041746

3751
Ka9

濟定檢省部文
用科語國校學範師校學女等高 日三十二月二年二十正大

子 女
法文本日代現

所輯編館成開

纂 編



広島大学図書

2000041746



版藏館成開京東

女子現代日本文法

目次

第一編	品詞(その一)	
第一章	總説	一
第二章	名詞	二
第三章	代名詞	六
第四章	動詞	九
第五章	形容詞	一
第六章	副詞	一三
第七章	接續詞	一六

目次



第八章	感動詞	一八
第九章	助動詞	一九
第十章	助詞	三
第二編 品詞 (その二)		
第一章	文語動詞の活用	二六
第二章	口語動詞の活用	四〇
第三章	動詞の活用の見分け方	四
第四章	形容詞の活用 附 形容動詞	四九
第五章	動詞の自他	五
第六章	用言の音便	五九
第七章	語尾の紛れ易い動詞	六四

第三編 品詞 (その三)		
第一章	助動詞の種類	六九
第二章	文語助動詞の活用	八二
第三章	文語助動詞の用法	八六
第四章	口語助動詞の用法	九七
第五章	助詞の用法	九九
第四編 文章		
第一章	文及び文の成分	一四
第二章	節	二四
第三章	文の成分の倒置及び省略	二七
第四章	文の組織上の種類	三四



第五章 文の性質上の種類……………一七

附録 文法上許容スベキ事項

附表 動詞活用表

口語助動詞活用表

目次終

女子現代日本文法

第一編 品詞 (その一)

第一章 總説

一 一年の計は春にあり、一日の計は晨にあり。
二本を讀むのによい時節となりました。

我が國の言葉には、右の一のやうに、文章にだけ用ひるものと、二のやうに、日常の談話に用ひるものとの二種がある。この中、文章用のものを**文語**といひ、談話用のものを

文語

口語

口語といふ。

文法

文語にも口語にもそれと一定の法則がある。この法則を文法といふ。

一春は花咲き、秋は實を結ぶ。

二これからおほいに勉強をいたします。

右の文章で、一は九つの語に分れ、三は七つの語に分れる。この分れた一つの語は、言葉の最小単位である。言葉の最小単位を單語といふ。

單語

第二章 名詞

文語

紫式部は才女なり。

口語

秀吉は英雄である。

名詞

山の上にも櫻あり。

水清ければ、魚棲まず。

勤勉は幸福の母なり。

學問に遅き時なし。

飛行機が空を飛んでゐる。

平和の鐘が響きました。

婦人の運動が盛になつた。

悪い所は似易い。

右の傍線を施したものは、いづれも物事の名として用ひる單語である。かやうに、物事の名として用ひる單語を名詞といふ。

注意

一お琴、み心、機嫌、姉君、叔父上、林先生などは、物事を丁寧にいふ場合に用ひる名詞である。

二山々、國々、歌など、娘ども、親たちなどは、物事が多数であることを表す名詞である。

名詞の中には、物事の數量や順序を表すものがある。

一 十 萬 億

一本二冊 人五人 家十軒 金百圓

下駄三足 洋服四着 鉛筆五ダース いくつ

一つめ 二つめ 三等 四級

二 五軒目 六號 第七回 第八番

二の鳥居 三の巻 大正十二年 いくつめ

右の傍線を施したものの中、一は「いくつ」と数を数へるもの、二は「いくつめ」と順序を数へるものである。これらも広い意味では物の名であるから名詞である。

注意 右のやうな名詞を特に數詞といふこともある。

名詞は文語も口語も同じである。

練習

次の文から名詞を抜き出せ。

一 春は來りぬ、山越えて。 大和に入れば懐かしや。

吉野の川の川上に、 養着て下る筏師が、

笠の上にもほろ／＼と、 雪の如くに花が散る。

二 五月の初は立夏にて、もはや夏の季節なり。蛙の聲もやうやく聞ゆ。五月の二日または三日を八十八夜といふ。立春より數へて八十八日目に當るの意なり。

三 家庭は私達の休養所であり慰安所であります。たとひ貧しい生活をしてゐても、家族が互に助け合つて睦じく暮して居れば、人の知らない和樂を味ふことが出来ます。

四 プランコこげよ、數へてこげよ。一つ、二つ、三つ、四つ。十までこいだら代りませう。

第三章 代名詞

文語

われはかれを呼べり。

これとそれとを買はん。

こゝかしこを散歩せり。

あちこちと奔走す。

口語

あなたと遊びませう。

あれにいたします。

そこに鳩が居る。

そちらへいかう。

代名詞

右のわれ・かれ・あなたは人の名の代りに、これ・それ・あれは物の名の代りに、こゝ・かしこ・そこは場所の名の代りに、あち・こち・そちらは方角の名の代りに用ひる單語である。かやうに、物事の名の代りに用ひる單語を代名詞といふ。

注意

一代名詞の中にはたれ・なに・どこ・どちらなどのやうに、指すとこ

ろの不定なものもある。

ニわたくしども・あなたがた・汝ら・おまへ・たちなどは、物事が多數であることを表す代名詞である。

代名詞には、文語と口語とで形の異なるものがある。

文語 わらは 貴嬢 たれ あち こち……など。

口語 わたし あなた だれ あちら こちら……など。

代名詞一覽表

人代名詞	自稱	對稱	他稱	不定稱
われ(文)	なんぢ(文)	かれ(文)	たれ(文)	これ(文)
わらは(文)	あなた(口)	あなた(口)	あ(口)	あなた(口)
わたくし(口)	おまへ(口)	あ(口)	れ(口)	だれ(口)
じぶん(口)				

指 示 代 名 詞

近 稱	中 稱	遠 稱	不 定 稱
事物に こ れ(口文)	そ れ(口文)	あ か れ(口文) れ(文)	ど な い れ(口文) に(口文) れ(文)
場處に こ こ(口文)	そ こ(口文)	あ か そ(口文) こ(文)	ど い こ(口文) づ(口文)
方角に こ こ(口文)	そ ち(口文)	あ か ち(口文) な(文)	ど い ち(口文) づ(口文)

注意 この「お」かた「そ」(お)かたなども、人代名詞の他稱に屬するものである。

練習

次の文から名詞代名詞を抜き出せ。

- 一そこを左に折れ、かしこを右に曲れば、直ちに郊外に出でん。
- 二この月この日惜しむべし。昨日の我は我ながら、
- あすの日今日の日にあらず。この年この日惜しむべし。
- 三わらははおんみを妹とも思へり。
- 四その枝よりか、いつそあの枝を折りませう。
- 五あなたはどちらからいらつしやいましたか。

第四章 動詞

文 語

蝶は舞ひ、鳥は歌ふ。
姉は本を讀む。
能ある鷹は爪を隠す。

口 語

春が來ると、花が咲く。
朝は五時に起きる。
妹の病氣で心配する。

動詞

右の傍線を施したものの中、舞ひ歌ふ來る・咲くは自然物の動作を、讀む起さるは人の動作を、心配するは心の動作を表す詞である。また、あるは物事の存在することを表す詞である。かやうに、物事の動作や存在を表す單語を動詞といふ。

注意

文語の動詞と口語の動詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から動詞を抜き出せ。

- 一 病は口より入り、禍は口より出づ。
- 二 春は花咲き、夏は茂り、秋は實り、冬は眠る。
- 三 人の是非を見ることは易く、己の長短を知るとは難し。

形容詞

四 あまりに忙しくて、散歩する暇ありません。
五 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。

第五章 形容詞

文語

口語

梅の花は芳し。

夏は暑く、冬は寒い。

朱は赤し。

年が若くても、考が深い。

山高く、水清し。

運動場は廣い。

右の傍線を施したものは、いづれも物事の有様を表す單語である。かやうに、物事の有様を表す單語を形容詞といふ。

注意

文語の形容詞と口語の形容詞との區別は後に説明する。

練習

次の文から形容詞を抜き出せ。

- 一 義は泰山よりも重く、命は鴻毛よりも軽し。
- 二 帯には短く、襷には長し。
- 三 世間は年中忙しく、騒がしい。
- 四 兎は前足が短くて、後足が長い。
- 五 この品物は價が安くて、質がよい。

體言
用言

以上説明したものの中、名詞と代名詞は物事の本體を表すものであるから、これを總稱して體言といふ。また、動詞と形容詞は體言の作用を表すものであるから、これを總稱して用言といふ。

第六章 副詞

文語

風ますくはげし。

全軍殆ど亂る。

病頗る重し。

面影ちらり見ゆ。

姉は直ちに出發せり。

口語

お前はしつかりやれ。

仕事がなかく苦しい。

果物は實にうまい。

形がずつと大きい。

速力はもつと早い。

副詞

右の傍線を施したものは、いづれも下の圈點を施した用言の意味を修飾するものである。かやうに、用言の意味を修飾する單語を副詞といふ。

副詞には、この外、他の副詞の意味を修飾するものご、體言の意味を修飾するものごがある。

文語

いと静かに歩む。

甚だ速かに走る。

口語

もつご綺麗に掃除せよ。

極ゆつくりやれ。

右のいと甚だは、それご副詞の静かに速かにの意味を修飾し、もつと極は、それご副詞の綺麗にゆつくりの意味を修飾するもので、いづれも副詞である。

文語

僅かに五里の道なり。

凡そ五十人を一組とす。

口語

たつた五里の道だ。

すつと北だ。

右の傍線を施したものは、いづれも下の圈點を施した體

言の意味を修飾するもので、同じく副詞である。

副詞とは、主に用言の意味を修飾し、時には體言や他の副

詞の意味を修飾する單語をいふ。

副詞の用法は文語も口語も同じである。

練習

次の文から副詞を抜き出せ。

一病人は、なるべく親切に、丁寧に、また静かにこれを介抱すべし。

二いよ／＼降りしきる雨に、水はますます増加せり。

三午砲がドンと鳴ると、お腹が急にすくやうに感じます。

四ああなたが非常に望んでいらつしやる品は、たつた一つしかありません。

六叔母さんは大變丁寧に挨拶をせられます。

第七章 接續詞

文 語

花及び月を眺む。

書を讀むか、若しくは音

樂を練習すべし。

風吹き、且雨降る。

口 語

姉とそして私が留守番で

した。

行くか、それとも歸るか。

風が吹く、それに雨も降る。

接續詞

右の傍線を施したものは、上下の語句や文を結びつける
單語である。かやうに、語句や文を結びつける單語を接
續詞といふ。

接續詞の用法は文語も口語も同じである。

練習

次の文から接續詞を抜き出せ。

- 一 茶並に生絲は我が國の二大輸出品なり。
- 二 夜食を節せよ。然らざれば健康に害あり。
- 三 彼は琴オルガン及びヴィオリンを學べり。
- 四 汝は地理若しくは歴史を復習すべし。
- 五 今日雨が降つた。だから、音樂會には人が少かつた。
- 六 私は年末年始または中元などの贈答は、止めたがよいと思ひます。
- 七 作文は書きました。けれども、先生にはまだ出しません。
- 八 私は走ることは早い。でも、あなたにはかなひません。
- 九 彼は身分は卑しい。しかし、徳は高い。
- 一〇 自由かそれとも死か、どれか一つを選べ。

第八章 感動詞

文 語

あゝ、かなしいかな。

あな、うらやまし。

いざ、行かん。

いざや、歌はん、もろとも

に。

口 語

あ、いた(痛)。

あら、お珍しい。

さあ、参りませう。

おつと、あぶない。

感動詞

右の傍線を施したもののやうに、主・に・感情・の・動・く・時・に・發・する・單・語・を・感・動・詞・と・い・ふ・。

感動詞の用法は文語も口語も同じである。

練習

次の文から副詞・接續詞・感動詞を抜き出せ。

一 あはれ、めでたき今日の日や。 あはれ、楽しき今日の日や。

いざ、もろとも。 うちつどひ。 君が八千代を歌はなん。

二 やよ、汝、思うてもみよ。 齡既に十五歳に達せしものにして、未だかかることを知らざるものいづこにかある。

三 ねえ、あなたがそのおつもりなら、願つてもない幸ひです。 きつとそれを實行させよう。 しかし、いざ實行するといふまでは、誰にも洩さないやうにさせよう。

四 あゝ、危い。 そら、そら、子供が熱湯へ這入る。 危い。 そら、そら。

第九章 助動詞

文語

口語

助動詞

字を書か	妹を呼ば	人を誘は	舟を漕が	遅刻し	門を閉ち	塵を捨て	試合を見
ず。	ん。	しむ。	たり。	たり。	けり。	ぬ。	
字を書か	妹を呼ば	人を誘は	舟を漕が	遅刻し	門を閉ち	塵を捨て	試合を見
ない。	う。	せる。			た。		

右の傍線を施したもののやうに、常に動詞に附屬して、動詞の意味を補助する。單語を助動詞といふ。

注意

文語の助動詞と口語の助動詞との區別は後に説明する。

助動詞は更に他の助動詞に結びつくことがある、また、稀には體言に結びつくこともある。次の例を見よ。

文語

口語

雨は降らざるべし。
今年は豊年なり。

父は歸りますまい。
これが私の家だ。
です。

練習

次の文から助動詞を抜き出せ。
一 驕るものは久しからず。

- 二 習慣は第二の天性なり。
- 三 先生生徒に運動せしむ。
- 四 本校は昨日運動會を舉行せり。
- 五 やがて藤の花も咲かん。
- 六 出る杭は打たれる。
- 七 早く歸つて兩親の顔が見たい。
- 八 大聲で呼んでも返事もしない。
- 九 姉が妹に着物を洗はせる。
- 一〇 午後三時までにはきつと参ります。
- 一一 それぐらゐの本は私にも讀まれる。

第十章 助詞

文語

櫻の花。

口語

二階から落ちる。

月と雪と花。

缺で切る。

右ののとからでは、いづれも體言に添はつて、他の單語との關係を表すものである。

文語

風烈しくとも、行かん。

風が烈しくても、行かう。

差支あれば、缺席す。

差支があるから、缺席する。

右のともはてもからは、いづれも用言に添はつて、他の單語との關係を表すものである。

かやうに、語の下に添はつて、他の語との關係を表す單語を助詞といふ。

助詞

練習

次の文から助詞を抜き出せ。

- 一 品性は人の鏡なり。
- 二 去らんと欲せば、直ちに去れ。
- 三 期限は今日に迫れども、準備は未だ成らず。
- 四 地球は太陽の周囲を廻轉す。
- 五 父は遠方に行き、母は親戚に行けり。
- 六 夏になると、木が茂る。
- 七 寒いので、着物を重ねる。
- 八 今晩は暇がありますから、お話にお出で下さい。
- 九 心の鬼が身を責める。
- 一〇 雪が降りましても、参りませう。
- 一一 父は私が卒業するのを楽しみにしてゐます。

品詞

これまで述べて来た名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞・助詞の九つを、それぞれ品詞といふ。

練習

次の文を品詞に分けよ。

- 一 租税は期日までに必ず役所に納むべし。
- 二 今年の暑氣は昨年よりも烈し。
- 三 予は奈良に遊び、次いで吉野に廻れり。
- 四 すはといへば、すぐに出發する用意が出来た。
- 五 日本は面積は狭いが、人口はなかく多い。
- 六 今の戦争は昔と違ふから、一人で功名を立てるのはむづかしい。
- 七 平生勉強してゐますから、試験の時にはあわてません。

第一編 品詞 (その二)

第一章 文語動詞の活用

活用

一 もろともに死なん。
 二 悉く死に絶えたり。
 三 毒を飲めば死ぬ。
 四 死ぬる覺悟にて出征す。
 五 父死ぬれば、子相續す。
 六 いさぎよく死ぬ。

右の例のやうに、死ぬといふ動詞は、その語形が種々に變化する。かやうに、語形の變化することを活用といひ、活

活用形

用のおのくの形の活用形といふ。

活用形の名稱

右に擧げた六つの活用形には、それと特別の名稱がある。

未然形

第一活用形は、死なんのやうに、未然の意味を表す形であるから、これを未然形といふ。

連用形

第二活用形は、死に絶えのやうに、用言に連ねる形であるから、これを連用形といふ。

終止形

第三活用形は、文章が終止する場合に用ひる形であるから、これを終止形といふ。

第四活用形は、死ぬる覺悟のやうに、體言に連ねる形であるから、これを終止形といふ。

連體形

已然形

命令形

るから、これを連體形といふ。

第五活用形は、父死ぬれば、子相續すのやうに、多く事が已に定まつてゐる場合に用ひる形であるから、これを已然形といふ。

第六活用形は、命令の意味を表す形であるから、これを命令形といふ。

四段活用

	讀	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ア	ま	ま	み	む	む	め	め
イ							
ウ							
エ							
段							

未然形 書を讀まん。

連用形 書を讀み果てたり。

終止形 書を讀む。

連體形 書を讀む暇なし。

已然形 書を讀めば、知識を増す。

命令形 書を讀め。

四段活用

右のやうに、讀むといふ動詞は五十音圖の「ア・イ・ウ・エ」の四段に活用するから、これを四段活用といふ。

注意 四段活用は、終止形と連體形と、また已然形と命令形とは、いづれも同形である。

咲く・勝つ・思ふ・走る、の活用を檢せよ。

ラ行變格活用

	有	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ア段	ら						
イ段	り						
ウ段	る						
エ段	れ						
段	れ						

未然形

面白きこともあらん。

連用形

悲しき折もありき。

終止形

面白きことあり。

連體形

思慮ある人は少し。

已然形

差支あれば、行かず。

命令形

長へに幸あれ。

注意

きに續くものも連用形である。

ラ行變格活用

右のやうに、有りと**いふ**動詞はア・イ・ウ・エの四段に活用するけれども、その終止形が四段活用と異なるから、これを**ラ行變格活用**といふ。

ナ行變格活用

ナ行變格活用

死ぬといふ動詞は、前に述べた用例で見るやうに、ア・イ・ウ・エの四段に活用するが、その連體形と已然形とが四段活用と異なるから、これを**ナ行變格活用**といふ。

上一段活用

	見	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
イ	み						
	み						
	みる						
	みる						
	みれ						
段	みよ						

未然形 試合を見ん。

連用形 試合を見たり。

終止形 月を見る。

連體形 見る人少し。

已然形 見れども見えぬ。

命令形 心して見よ。

注意 なりに續くものは連用形どもに續くものは已然形である。

上一段活用

右のやうに、見るといふ動詞はイ段ばかりに活用するから、これを上段活用といふ。

着る・似る・煮る・射る、の活用を檢せよ。

上二段活用

	起				
イ	き	未然形	ウ	く	終止形
	き	連用形		くる	連體形
段			段	くれ	已然形
				きよ	命令形

未然形 直ちに起きん。

連用形 起き終りぬ。

終止形 早く起く。

連體形 早く起くる人は稀なり。

已然形 早く起くれば、心地よし。

命令形 速かに起きよ。

右のやうに、起くといふ動詞はイ・ウの二段に活用するか

上二段活用

ら、これを上二段活用といふ。

落つ・閉つ・強ふ・懲る、の活用を檢せよ。

下一段活用

	蹴	
エ 段	け	未然形
	け	連用形
	ける	終止形
	ける	連體形
	けれ	已然形
	けよ	命令形

未然形

鞠を蹴ん。

連用形

鞠を蹴たり。

終止形

鞠を蹴る。

連體形

鞠を蹴る人は誰ぞ。

下一段活用

下二段活用

已然形

強く蹴れば、高く飛ぶ。

命令形

鞠を蹴よ。

注意 未然形の蹴んは現代文では殆ど用ひない。

右のやうに、蹴るといふ動詞はエ段だけに活用するから、これを下一段活用といふ。

	忘	
エ 段 ウ 段 エ 段	れ	未然形
	れ	連用形
	る	終止形
	るゝ	連體形
	るれ	已然形
	れよ	命令形

未然形

悲しさを忘れん。

連用形 恩を忘れ果てたり。

終止形 恩を忘る。

連體形 恩を忘るゝ人多し。

已然形 恩を忘るれば、禽獸に同じ。

命令形 悲みを忘れよ。

下二段活用

右のやうに、忘るといふ動詞はウ・エの二段に活用するから、これを下二段活用といふ。

捨つ・受く・兼ね・譽むの活用を檢せよ。

カ行三段活用

未然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形

(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
才段	イ段	ウ			段	才段

未然形 姉もこん。

連用形 妹もきたり。

終止形 妹もく。

連體形 くる人もなし。

已然形 夏くれれば、暑し。

命令形 早くこよ。

注意

終止形はくと言ひきることは少い。

カ行三段活用

右のやうに、來といふ動詞はイ・ウ・オの三段に活用するから、これをカ行三段活用といふ。

注意 カ行三段活用はカ行變格活用ともいふ。

サ行三段活用

	(爲)	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
エ	せ						
イ	し						
ウ	す						
		する					
段		すれ					
エ	せよ						

未然形 運動をせん。

連用形 運動をしたり。

終止形 運動をす。

サ行三段活用

連體形 運動をする人は健康なり。

已然形 運動をすれば、心地よし。

命令形 運動をせよ。

右のやうに、爲といふ動詞はイ・ウ・エの三段に活用するから、これをサ行三段活用といふ。

注意 サ行三段活用はサ行變格活用ともいふ。

サ行三段活用の爲は、他の詞と結びつくことが多い。

出發す 勉強す 練習す

正しうす 全うす 罪す

此等はいづれもすが他の語と結びついて、サ行三段活用となつたものである。

注意 一 運動すは一つの動詞である。
 二 運動をすは、助詞が中間にあるから、三つの單語である。
 議論す・辱うす・讀書す・賞す、の活用を檢せよ。

第二章 口語動詞の活用

口語四段活用

口語四段活用

	(文語 段)	(文語ラ變)	(文語ナ變)
未然形	咲かう。	有らう。	死なう。
連用形	咲きます。	有ります。	死にます。
終止形	咲く。	有る。	死ぬ。
連體形	咲く時。	有る處。	死ぬ人。

口語上一段活用

右のやうに、文語の四段活用・ラ行變格活用・ナ行變格活用は、口語ではいづれも四段活用となる。

口語上一段活用

	(文語上一段)	(文語上二段)
未然形	見よう。	起きよう。
連用形	見ます。	起きます。
終止形	見る。	起きる。
連體形	見る人。	起きる時。

注意 ますに接するものは連用形である。
 已然形 咲けば。 有れば。 死ぬば。
 命令形 咲け。 有れ。 死ぬ。

口語下一段活用

右のやうに、文語の上一段活用・上二段活用は、口語では上一段活用となる。

口語下一段活用

已然形	見れば。	起きれば。
命令形	見よ。	起きよ。

文語下一段	(文語下二段)
-------	---------

未然形	蹴よう。	忘れよう。
連用形	蹴ます。	忘れます。
終止形	蹴る。	忘れる。
連體形	蹴る時。	忘れる人。
已然形	蹴れば。	忘れれば。

口語力行三段活用

右のやうに、文語の下一段活用・下二段活用は、口語では下一段活用となる。

口語力行三段活用

命令形	蹴よ。	忘れよ。
未然形	誰かこよう。	
連用形	誰かきます。	
終止形	誰かくる。	
連體形	くる人がない。	
已然形	くればよい。	
命令形	早くこい。	

右のやうに、文語の力行三段活用は口語でも力行三段活

口語サ行三段活用

用であるが、終止形と命令形とは文語のと異なる。

口語サ行三段活用

- 未然形 勉強をしよう。
- 連用形 勉強をします。
- 終止形 勉強をする。
- 連體形 勉強をする人。
- 已然形 勉強をすればよい。
- 命令形 勉強をせよ。

右のやうに、文語のサ行三段活用は口語でもサ行三段活用であるが、未然形と終止形とは文語のと異なる。

以上説明した文語動詞の活用と口語動詞の活用とを比較すると、次のやうになる。

文語 (九種)	口語 (五種)
四段活用	四段活用
ラ行變格活用	
ナ行變格活用	
上一段活用	上一段活用
上二段活用	
下一段活用	下一段活用
下二段活用	
カ行三段活用	カ行三段活用
サ行三段活用	サ行三段活用

第三章 動詞の活用の見分け方

文語動詞の活用の見分け方

文語動詞の活用の見分け方

- 一 四段活用 咲か(ア)〓ず。 讀ま(ア)〓ず。
- 二 上二段活用 起き(イ)〓ず。 落ち(イ)〓ず。
- 三 下二段活用 捨て(エ)〓ず。 枯れ(エ)〓ず。

右のやうに、動詞を^レずに連ねる場合に、一のやうにア段から續くものは四段活用、二のやうにイ段から續くものは上二段活用、三のやうにエ段から續くものは下二段活用である。たゞし、次の語はすべて記憶せよ。

- ナ行變格活用 有り 居り 侍りは現代文では用ひない。

口語動詞の活用の見分け方

口語動詞の活用の見分け方

- ナ行變格活用 死ぬ 往ぬ
- 上一段活用 着る 似る 煮る 乾る 射る
- 下一段活用 鑄る 居る 見る 率ゐる
- カ行三段活用 蹴る
- カ行三段活用 來る
- サ行三段活用 爲る

- 一 四段活用 咲か(ア)〓ない。 讀ま(ア)〓ない。
 - 二 上一段活用 起き(イ)〓ない。 落ち(イ)〓ない。
 - 三 下一段活用 捨て(エ)〓ない。 枯れ(エ)〓ない。
- 右のやうに、動詞を^レずに續ける場合に、一のやうにア段

から續くものは四段活用、二のやうにイ段から續くものは上一段活用、三のやうにエ段から續くものは下一段活用である。たゞし、次の二語は記憶せよ。

カ行三段活用

來。

サ行三段活用

爲。

練習

一次の文語動詞の活用名を示せ。

遊ぶ。達す。怖ぶ。過ぐ。治む。來る。來。信ず。射る。
留む。死ぬ。蹴る。

二次の口語動詞の活用名を示せ。

交る。埋める。出發する。爲る。爲す。居る。居る。漕ぐ。

三次の文の傍線を施した動詞の活用形は何か。

イ夕の空を眺むれば、浮きて漂ふ叢雲を、

峰の嵐に拂はせて、輝き出づる望の月。

心の儘になるならば、取りて飾りて我が母の、

朝の鏡にまゐらせん。

□ 東京の上野停車場から青森行の列車に乗りました。仙臺までは水戸を通つて行く常磐線の方が面白からうと思ひましたが、やはり東北本線の方を選びました。

第四章 形容詞の活用 附形容動詞

形容詞も動詞と同じく活用する品詞であるが、その種類はく活用としてく活用との二つだけである。

文語形容詞の活用

文語形容詞の活用

く活用	高	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
活し	美	く	く	し	き	けれ
用く	美	しく	しく	し〇	しき	しけれ

未然形

山高くば、登らじ。

花美しくば、見ん。

連用形

山高く聳ゆ。

花美しく咲く。

終止形

山高し。

花美し。

連體形

高さ山あり。

美しき花なり。

已然形

山高ければ、登らず。

花美しければ、愛でらる。

注意

未然形を立てない説もある。

口語形容詞の活用

口語形容詞の活用

無し・面白し・悲し・苦し、を活用させよ。

く活用	高	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
活し	美	く	く	い	い	けれ
用く	美	〇	しく	しい	しい	しけれ

連用形

高く聳える。

美しく咲く。

終止形

山が高い。

花が美しい。

連體形

高い山がある。

美しい花だ。

已然形

高ければ、登らう。

美しければ、愛でられる。

注意

口語では未然形はない。

文語形容動詞

無い面白い悲しい苦しいを活用させよ。

文語形容動詞

形容詞の連用形が動詞のありに結びついて、ラ行變格活用となることがある。

高くあり || 高かり。

美しくあり || 美しかり。

副詞の穩かに堂々となどが動詞のありに結びついて、ラ行變格活用となることもある。

穩かにあり || 穩かなり。

堂々とあり || 堂々たり。

右の例の高かり美しかり穩かなり堂々たりなどのやう

口語形容動詞

に意味は形容詞のやうで、活用の形式は動詞と同じものを形容動詞といふ。

靜かなり明かなり嬉しかり涼しかり洋々たり爛漫たり、の活用を檢せよ。

口語形容動詞

口語形容動詞は、

今日は實に穩かな日です。

明日は今日よりは涼しからうと思ひます。

右の傍線を施したもののやうに用ひられるが、完全な活用形はない。

表用活詞形容

用活くし		用活く		名用活
口語	文語	口語	文語	
美		高		語用活
○	しく	○	く	未然形
しく	しく	く	く	連用形
しい	し○	い	し	終止形
しい	しき	い	き	連體形
しけれ	しけれ	けれ	けれ	已然形

表用活詞動形容

洋美面	々白	か	語用活							
				未然形						
ら	り	り	る	れ	れ	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形

練習

次の文から形容詞と形容動詞とを抜き出せ。

一人の苦を見て嬉しく思ふ人の心はあさまし。

二川端を渡る涼しき風は己が面を拂ひ、漫々たる水の上には銀波走る。

三憂しとも思ひ、つらしとも思ひながら、そのこと爲し果てたる後、湯あみしたる時の心地はいとすがすがし。

四この美しい海の色は、どこの綺麗な絹物店でも見出すことは出来ずまい。

五細い、太い、短い、長い、無数の氷柱が枝から垂れた状は、實にみごたなものです。

六右と左の眺望を低いく、岬で限られた小さい入江は、池か湖かのやうに見える。

第五章 動詞の自他

他動詞

文語

姉は琴を弾す

妹は本を讀む

口語

猫が鼠を捕る

下女が門を開ける

他動詞

自動詞

右の例の彈す・讀む・捕る・開けるといふ動詞は、その動作の働を受ける琴・本・鼠・門などの詞を必要とする。即ち此等の動詞は他に働を及ぼすものである。他に働を及ぼす動詞を他動詞といふ。

文語

花咲く

雨降る

口語

夜が明ける

日が暮れる

自動詞

右の例の咲く・降る・明ける・暮れるといふ動詞は、自己だけで花・雨・夜・日の働を務めて、他に働を及ぼさないものである。他に働を及ぼさない動詞を自動詞といふ。動詞の中には、自動詞と他動詞とその形が全く同じいものもあり、また二つの形のよく似たものもある。

文

花開く

門を開く

語

(四段)……………自動詞

(四段)……………他動詞

二 水流る。 (下二段)……………自動詞
 水を流す。 (四段)……………他動詞

文 語

一 風が吹く。 (四段)……………自動詞
 笛を吹く。 (四段)……………他動詞

二 舟が沈む。 (四段)……………自動詞
 舟を沈める。 (下二段)……………他動詞

右の一は自動詞と他動詞とが全く同じい形であり、二は形がよく似てゐるものである。

練習

一次の文語動詞を自動詞と他動詞とに分け、その何活用であるかを述べよ。

イ 月見ゆ。
 月を見る。

□ 葉落つ。
 葉を落す。

ハ 水冷ゆ。
 頭を冷す。

二次の口語動詞を他動詞と自動詞とに分け、その何活用であるかを述べよ。

イ 足が進む。
 足を進める。

□ 人が笑ふ。
 人を笑ふ。

ハ 帯が解ける。
 帯を解く。

三次の文から動詞を抜き出し、その自他を區別せよ。

イ 身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐることは難し。

□ 塵も積れば山となる。

ハ 試験が終りましたら、その日に郷里へ歸ります。

第六章 用言の音便

言語は發音の便によつて、もとの音が變つて他の音とな

音便

ることがある。これを音便といふ。音便には、い音便・う音便・撥音便・促音便の四種ある。

い音便

仰ぎて

天を仰いで泣く。

悲しき

あゝ、悲しいかな。

難き

世に處するもまた難いかな。

聞きて

それは聞いて知つてゐる。(口)

咲き(たり)

花が咲いた。(口)

ござります

さやうでございます。(口)

い音便

右のやうに、い音に變るものをい音便といふ。

う音便

買ひて

本を買って歸る。

雇ひて

人を雇うて掃除す。

輕々しく

輕々しく振舞ふ。

長く

髪を長く垂れる。(口)

苦しくて

苦しうて走れません。(口)

右のやうに、う音に變るものをう音便といふ。

撥音便

飲みて

水を飲んで苦みを忘る。

踏みて

夕に月を踏んで歸る。

呼びて

呼んでも答へません。(口)

飛び(たり)

溝を飛んだ。(口)

う音便

撥音便

右のやうに、撥ねる音のんに變るものを撥音便といふ。

促音便

勝ちて

勝つて兜の緒を締めよ。

誓ひて

成功を誓つて都に上る。

破り(たり)

やつと敵を破つた。(口)

歸りて

すぐ歸つて來ます。(口)

促音便

右のやうに、促る音のつに變るものを促音便といふ。
い音便の時にひゐる音便の時にふ、撥音便の時にむの假名を用ひるのは、いづれも誤である。

練習

一次の文の音便の種類を説明せよ。

イ 且には星を戴いて出で、夕には月を踏んで歸る。

ロ 舟を僦うて隅田川を下る。

ハ 舊い友に逢つて、珍しい話を聞いた。

ニ 大聲で呼びましたら、飛んで走つて來ました。

ホ 檣の高い舟が群て、荒々しい船頭の呼聲が舟から舟へと響いてゐた。

二次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。

イ 先生に就ひて文法を學ぶ。

ロ 敵は遂に國を割ひて和を請へり。

ハ 一を開ひて十を知る兒童を神童といふ。

ニ よふこそ來てくださるました。

ホ そんなものを買ふては悪いとおつしやゐました。

へ 何分とも宜しふお願いいたします。

語尾の紛れ
易い動詞

第七章 語尾の紛れ易い動詞

動詞はすべて五十音圖の或一行だけに活用するものであるから、その何行に活用するかを知らば、動詞の假名遣を誤ることはない。

ア行 あ い う え お

ハ行 は ひ ふ へ ほ

ヤ行 や い ゆ え よ

ワ行 わ ろ う ゑ を

紛れ易い動詞は、右に示したやうに、ア行・ハ行・ヤ行・ワ行に活用するものである。

ア行の動詞

得ウ (下二段活用)

射イ 鑄イ (上一段活用)

ヤ行の動詞

老ウ 悔ウ 報ウ (上一段活用)

甘ウ 癒ウ 覺ウ 聞ウ 消ウ

越ウ 肥ウ 凍ウ 榮ウ 牙ウ

聳ウ 絶ウ 費ウ 煮ウ 映ウ (下二段活用)

生ハ 冷ハ 殖ハ 吠ハ 見ハ

燃ハ 萌ハ 悶ハ

ワ行の動詞

居^{*}る 率^{*}ある (上一段活用)

植^{*}う 飢^{*}う 据^{*}う (下二段活用)

ハ行の動詞

右に挙げたものの外は、大抵ハ行の動詞と心得よ。

次に紛れ易いものはザ行とダ行とである。

ザ行 ざ じ ず ぜ ぞ

ダ行 だ ぢ づ ぜ ぞ

ザ行の動詞

混^{*}ず (下二段活用)

論^{*}ず 混^{*}ず 信^{*}ず……など (ザ行三段活用)

ダ行の動詞

右に挙げたものの外は、ダ行の動詞と心得よ。

以上説明したものは、すべて文語の動詞だけであるが、口語の場合には、これによつて直ちに推測することが出来る。例へば、「犬吠ゆ」の場合に、「吠ゆ」がヤ行下二段活用であることを知ると、口語は下一段活用であるから、「犬が吠える」となり、「木を植う」の場合に、「植う」がワ行下二段活用であることを知ると、口語は下一段活用であるから、「木を植ゑる」となることがわかる。

練習

一次の空位に適當な文字を入れよ。

イ 鐘の音 呀□て聞□たり。

ロ 飢□且凍□たるものは、衣食を選ぶに暇なし。

ハ 誓つて君に恩を報□べし。

ニ 堪□忍ぶことが必要だと思□ます。

ホ 物質と精神との兩面を備□なければ、完全な生活とはい□ませ
ん。

二 左の語の文語の活用を問ふ。

論ず。諷す。費ゆ。消ゆ。侍り。据う。

三 左の語の口語の活用を問ふ。

吠える。鑄る。射る。居^{*}る。堪へる。

第三編 品詞 (その三)

第一章 助動詞の種類

時の助動詞

文 語

やがて花も咲かん。

彼は將來發達せん。

既に花も散りき。

妹も學校に行きけり。

我は手紙を書き終へつ。

父は叔母の家に行きぬ。

口 語

咲かう。

發達しよう。

散つた。

行つた。

終へた。

行つた。

時の助動詞

私は動物園を見たり。	見た。
姉は漸く裕を縫へり。	縫つた。

右の文語のんきけりつぬたりりと、口語のうようたとは、
 いづれも時間に關係することを表すから、これを時の助
 動詞といふ。

受身の助動詞

兄は父に叱らる。	叱られる。
私は委員に選舉せらる。	選舉せられる。

受身の助動詞

右の文語のらると、口語のれるられるとは、他から或動
 作を仕向けられる意を表すから、これを受身の助動詞と

いふ。

可能の助動詞

この書物は我にても讀 まる。	讀まれる。
-------------------	-------

我はいかなる困難にも 堪へらる。	堪へられる。
---------------------	--------

可能の助動詞

右の文語のらると、口語のれるられるとは、そのもの
 力で爲し得る意を表すから、これを可能の助動詞といふ。
 使役の助動詞

文語

口語

使役の助動詞

母は子に手紙を書かす。

書かせる。

主人は大工に家を建て

建てさせる。

さす。

母は子をして手紙を書

かしむ。

右の文語のす・さす・しむと、口語のせる・させるとは、他人に或動作を爲させる意を表すから、これを使役の助動詞といふ。

注意 文語助動詞のしむに對する口語助動詞はない。

敬語の助動詞

文語

口語

知事閣下は本校の卒業

臨まれる。

式に臨まる。

先生は生徒に本を教へ

教へられる。

らる。

殿下は知事を召さす。

殿下は博覽會を御覽ぜ

さす。

右の文語のる・らる・す・さすと、口語のれる・られるとは、いづれも尊敬の意を表すから、これを敬語の助動詞といふ。

注意 一文語助動詞のす・さすに對する口語助動詞はない。

二る・らるれる・られるは受身可能敬語の三様に用ひられず、さす

敬語の助動詞

は使役敬語の二様に用ひられるが、これらはいづれもその意味によつて區別すべきである。

敬語の助動詞には、右の外に、動詞から轉じたものがある。

文 語

口 語

殿下は本校に記念品を

くださる。

たまふ。

謹みて書を足下にたて

さしあげる。

まつる。

右のたまふ・たてまつる・くださる・さしあげるは、いづれも動作を表すから動詞である。

文 語

口 語

皇后陛下も蠶を飼ひた

まふ。

まつる。

謹みて新年を賀したて

お飼ひあそばす。

まつる。

右のたまふ・たてまつる・あそばす・まをすなどは、動詞の本来的の意味から轉じて、單に尊敬の意を表すだけであるから、敬語の助動詞である。

音樂會には必ず出席します。

あなたはどちらへいらつしやいますか。

右のますも敬語の助動詞であるが、この一語は口語特有のものである。

打消の助動詞

文語

風も吹かず。

友は學校に居らざりき。

我は人と争はじ。

彼は山に登るまじ。

口語

吹かぬ。吹かない。

私には出来なからう。

争ふまい。

登るまい。

打消の助動詞

右の文語の「ずざりじまじ」と、口語の「ぬないなからまい」とは、いづれも動作の意味を打消すものであるから、これを打消の助動詞といふ。この中、「じまじまい」の三語は、動詞の意味を直接に打消さないで、多少推し量つて打消す助動詞である。

推量の助動詞

文語

文典は本箱にあらん。

恐らく彼は出席せん。

霰降るらし。

月も出づべし。

山も見ゆるん。

風も荒れけん。

口語

あらう。

出席しよう。

降るらしい。

推量の助動詞

右の文語の「んらしべしらんけん」と、口語の「うようらしい」は、いづれも物事を推し量つていふ意を表すから、これを推量の助動詞といふ。この中、「けん」は過去の物事を推量

する場合だけに用ひられる。

注意

一文語助動詞のべしらんけんに對する口語助動詞はない。

二んうようは時と推量との二様に用ひられるが、その間の區別は次のやうである。

かの山奥にも人家はあらん。(あらう)

二階に上らばかの山も見えん。(見えよう)

右の文のやうに、單に物事を推量するものを推量の助動詞とし、その他はすべて時の助動詞とする。

べしは、推量の外に、命令・可能などの意を表すこともある。

一 汝は直ちに目的地に向つて出發すべし。

二 電報ならば數時間にして消息を通すべし。

右の一は命令の意を表し、二は可能の意を表す。

騒ぐべからず。

樹木を折るべからず。

べからは本來は推量の助動詞であるが、現代文では、主に右の用例のやうに、ずの上にあつて禁止の意を表すことが多い。

希望の助動詞

文 語

口 語

早く故郷に歸りたし。 — 歸りたし。

右のたしとたいとは希望の意を表すから、これを希望の助動詞といふ。

指定の助動詞

希望の助動詞

文 語

こゝは女學校なり。

我も人たり。

右のなりたりだ。ですは物事を指し定めていふ意を表すから、これを指定の助動詞といふ。

口 語

女學校だ。女學校です。

人だ。人です。

比較の助動詞

文 語

色、雪の如し。

歲月は流るゝが如し。

口 語

雪のやうだ。

雪のやうです。

流れるやうだ。

流れるやうです。

右の如しやうだやうですは、物事を比較する意を表すから、これを比較の助動詞といふ。

練 習

次の文から助動詞を抜き出して、その種類を説明せよ。

一 勝敗の数は已に定まれり。

二 かゝることはよもあるまじ。

三 日も既に暮れ果てけり。

四 東宮殿下には箱根に行啓せらる。

五 手の舞ひ足の踏むところを知らざりき。

六 應募者に自ら履歴書を書かす。

七 み吉野の山の白雪積るらし。

八 我にも繪をかきてたまはりたし。

- 九氣をつけてお育てまをします。
- 一〇母は下女に着物を洗はせる。
- 一一 貴い國に生れながら、國體を知らぬ。
- 一二 それを見つけたのは私です。
- 一三 私の外には、誰も知らないらしい。
- 一四 鐘が鳴つたのに、授業が始まらぬ。
- 一五 一日に十里ぐらゐは歩まれる。

第二章 文語助動詞の活用

助動詞も活用するものであるが、その種類は、動詞の活用に似たものと、形容詞の活用に似たものと、特殊の活用をするものとの三種に分れる。

動詞に似た
活用をする
助動詞

一 動詞に似た活用をする助動詞

時				敬語			受身		敬語		活用種類	
たら	○	な	て	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然形	
たり	○	に	て	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	連用形	
たり	けり	ぬ	つ	しむ	さす	す	らる	る	らる	る	終止形	
たる	ける	ぬる	つる	しむる	さする	する	らるゝ	るゝ	らるゝ	るゝ	連體形	
たれ	けれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	らるれ	るれ	已然形	
(たれ)	○	ね	てよ	しめよ	させよ	せよ	られよ	れよ	られよ	れよ	命令形	
			ナ行 變格	段 二 下								

形容詞に似た活用をする助動詞

推量	打消	指定		未然形
		定	指	
べから	ざら	たら	なら	(ら)
べかり	ざり	たり	なり	(り)
(べかり)	(ざり)	たり	なり	り
(べかる)	ざる	たる	なる	る
(べかれ)	ざれ	たれ	なれ	(れ)
○	ざれ	たれ	なれ	(れ)

注意

括弧内のものは現代文では殆ど用ひない。

二形容詞に似た活用をする助動詞

量	推	種活用	
		類形	形
まじく	べく	未然形	未然形
まじく	べく	連用形	連用形
まじ	べし	終止形	終止形
まじき	べき	連體形	連體形
まじけれ	べけれ	已然形	已然形
○	○	命令形	命令形

格 變 行 ラ

特殊の活用をする助動詞

三特殊の活用をする助動詞

比較	希望	種活用		三特殊の活用をする助動詞
		類形	形	
ごとく	たく	未然形	未然形	未然形
ごとく	たく	連用形	連用形	連用形
ごとし	たし	終止形	終止形	終止形
ごとき	たき	連體形	連體形	連體形
○	たけれ	已然形	已然形	已然形
○	○	命令形	命令形	命令形

量	推	時	打消	打	種活用		
					類形	形	
○	○	○	○	○	未然形	未然形	
○	○	○	○	○	連用形	連用形	
らし	らん(らむ)	けん(けむ)	ん(む)	き	ず	じ	終止形
らし	らん(らむ)	けん(けむ)	ん(む)	し	ぬ	じ	連體形
らし	らめ	けめ	め	しか	ね	じ	已然形
○	○	○	○	○	○	○	命令形

注意

括弧のあるものは、そのいづれを用ひてもよい。

練習

次の文から助動詞を抜き出して、その活用を示せ。

- 一 大元帥陛下には、特に某將軍を遣はして兵卒を督勵せさせ給ふ。
- 二 難解の書も努めて讀めば讀まるゝものなり。
- 三 はや曉近くなりぬれば、直ちに起き出でたり。
- 四 何事にも猥りに人に任すまじきものなり。
- 五 事務を執るには、瑣事たりとも仔細に吟味すべし。
- 六 人に問はるゝ時は、いかゞ答へん。
- 七 物語せさせて夜を明かしぬ。

時の表し方

時の表し方

第三章 文語助動詞の用法

雨降る。

馬走る。

右の降る・走るは、動作の現在行はれてゐることを表す。

雨降り
 つ。ぬ。たり。

雨降れり。

運動會を舉行せり。

右のやうに、現在を表す動詞につ・ぬ・たり・りを結びつけられ

ば、動作が現在完了したことを表す。
右の四つの助動詞の中、つぬたりは、すべての動詞の連用形に、りは四段活用の已然形とサ行三段活用の未然形とに結びつく。

月曜日に大掃除を行ひ
き。けり。

右のやうに、現在を表す動詞にきけりを結びつけられれば、動作が過去に起つたことを表す。
過去の意を表すきけりは、動詞の連用形に結びつく。ただし、きは、カ行三段活用とサ行三段活用との動詞には、次のやうに結びつく。

活用の種類	動/活 詞/用 形	
	未然形	連用形
カ行三段	來 ^レ	こし か
サ行三段	爲 ^ス	せし か
		しき か

用例

こし かし 急ぎこしかど及ばざりき。
こしか 急ぎこしかたゆくするを思ふ。
かし かし 急ぎこしかたゆくするを思ふ。
さしか 急ぎさしかど及ばざりき。
せし 無禮をせしは我の過なりき。

せしか 行かんとせしかど許されざりき。
 しき 直ちに敵を襲撃せんとしき。
 過去を表すきけりに、更につぬたりりを重ねれば、動作が
 過去に完了したことを表す。

一 溺れし子を救ひ
 てき。
 てけり。

二 春の半ばは過ぎ
 にき。
 にけり。

三 敵も逃げ
 たりき。
 たりけり。

四 源氏は平家を滅せりき。

一りけり。

右の中三以外は現代文では殆ど用ひられない。

今宵は母も歸らん。

やがて夏も來ん。

右のやうに、現在の動詞の未然形にんを結びつけければ、動作が未來に起る意を表す。

未來の意を表すんに、更につぬたりりを重ねれば、動作が未來に完了することを表す。

一 間もなく今日も暮れてん。

二 やがて藤の花も散りなん。

三 雨降り出でたらん折は、出發を中止すべし。

右の中、三以外は現代文では殆ど用ひられない。以上は時の助動詞の用法であるが、その他の助動詞が言と連続する法則は、次の表について見よ。

種類	未然形に	連用形に	終止形に	連體形に
ラ行變格	居ら	居り	居り	居る
ナ行變格	死な	死に	死ぬ	死ぬる
四段	讀ま	讀み	讀む	讀むる
上一段	見	見	見る	見る
上二段	起き	起き	起き	起きる
下一段	蹴	蹴	蹴る	蹴る
下二段	捨て	捨て	捨つ	捨つる
カ行三段	こ	き	く	くる
サ行三段	せ	し	す	する

未然形に: 居ら、死な、讀ま、見、起き、蹴、捨て、こ、せ
 連用形に: 居り、死に、讀み、見、起き、蹴、捨て、き、し
 終止形に: 居り、死ぬ、讀む、見る、起き、蹴る、捨つ、く、す
 連體形に: 居る、死ぬる、讀むる、見る、起きる、蹴る、捨つる、くる、する
 (が)如し

右の表によれば、

るすは四段活用ナ行變格活用ラ行變格活用の動詞の未然形に結びつく。

らるさすは、右の活用以外の動詞の未然形に結びつく。

しむずささりじは、すべての動詞の未然形に結びつく。

けんたしは、すべての動詞の連用形に結びつく。

らんらしまじべしべからは、動詞の終止形に、たゞし、ラ行變格活用の動詞には連體形に結びつく。

注意

右の外指定の助動詞のたゞしは體言だけに連続する。

此等の法則は、主に動詞と助動詞との接續に關するものであるが、

汝は我よりも強きなり。

空の様もいと長閑かなりき。

今より大いに奮發せざるべからず。

右のやうに、形容詞または形容動詞と助動詞との接續、助動詞相互の接續などに於ても、承接の法則は別に變らな
い。たゞし、現代文では、次のやうな用法も認められて
る。

サ行三段活用の動詞にらるさすを添へる場合には、その
未然形に連ねて、批評せらる掃除せさすなどとするべき

であるが現代文では、批評さる掃除さすなどとするこ
もある。(附録参照)

しむが下二段活用の動詞の得に接續する場合には、その
未然形に連ねて得しむとするべきであるが、現代文では、
「得せしむ」とすることもある。(附録参照)

すべての文の終は終止形で結ぶべきであるが、時の助動
詞きの場合には連體形で結んで、甚だ面白かりし「姉は歸
りし」などとするこもある。(附録参照)

サ行四段活用の動詞をししかに連ねる場合には、その連
用形から連ねて、暮しし時過ししかばなどとするべきで
あるが、現代文では、暮せし時過せしかばなどとするこ

もある。(附録参照)

練習

一次の文によつて、用言と助動詞との連続を説明せよ。

イ 未だ走らるゝ元氣あり。

ロ 露けき野を分け行きけり。

ハ ともに謀るに足らず。

ニ 日は既に暮れてけり。

ホ 夜は十時に至らざれば寢に就かず。

ヘ 義經の終はいかになりけん。

二次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。

イ 年老いて氣力大いに衰へり。

ロ 無用のことには關係せまじきものなり。

ハ 誓うて君恩に報ひるべし。

第四章 口語助動詞の用法

口語助動詞と口語動詞の連続については、次の表を見よ。

種類	未然形	連用形	終止形	連體形
四段讀ま	れる	読み	讀む	讀む
上一段起き	られる	起き	起さる	起きる(の)です
下一段捨て	さされる	捨て	捨てる	捨てる(の)です
カ行三段こ	よう	き	くる	くる(の)です
サ行三段し	まい	し	する	する(の)です

注意

口語助動詞の活用は巻末の活用表を見よ。

練習

- 一次の文から助動詞を抜き出して、用言との連続を説明せよ。
- イ たつた一度で懲りた。
- ロ どちらが多いか、これから比較しよう。
- ハ これほど便利な土地は外にはあるまい。
- ニ あの着物は私の妹にも着られる。
- ホ 那須與一に扇の的を射させる。
- ヘ 姉は縫物をするらしく、弟は本を讀むらしい。
- ト 雨が降る日でも出勤します。
- 二次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正せよ。
- イ こんなに面白い本はなかるうと思ふ。
- ロ あなたのお考に一任しましやう。
- ハ 聊か鄙見を述べやう。

條件の助詞

第五章 助詞の用法

條件の助詞

- 一 雨が降らば、行かじ。
- 二 水清くば、泳がん。
- 三 呼ばずば、來らじ。
- 四 苦あれば、樂あり。
- 五 水清ければ、魚棲まず。

文語

口語

- 雨が降れば、行くまい。
- 水が清ければ、泳がう。
- 呼ばなければ、來まい。
- 苦があれば、樂がある。
- 水が清ければ、魚が棲まな

右の中、文語のばは、一・二・三のやうに、活用する語の未然形

に結びついて假定の條件を表し、四・五のやうに、已然形に結びついて確定の條件を表す。たゞし、口語では、いづれも已然形だけに結びついて、假定と確定の條件を表す。

文語

- 一 雨降るとも、行かん。
- 二 招かずとも、行かん。
- 三 山高くとも、登らん。

口語

- 雨が降つても、行かう。
- 招かなくても、行かう。
- 山が高くても、登らう。

右のやうに、文語のともは、形容詞の連用形または動詞・助動詞の終止形に結びついて假定の條件を表す。たゞし、現代文では、數百年を経るとも。

いかに批評せらるゝとも。

掃除せしむるとも。

のやうに、連體形にも結びつく。(附録参照)

口語では、てもとなつて、活用する語の連用形に結びついて、假定の條件を表す。

文語

見れど
見えず。

水清けれど
泳がず。

呼びたれど
應へず。

口語

見るけれど
見えない。

水が清いけれど
泳がない。

呼んだけれど
應へない。

ども

けれども

右のやうに、文語のどもは、活用する語の已然形に結びついて、確定の條件を表す。
たゞし、現代文では、

何等の理由あるも、ありとも、入場を許さず。

期限は今日に迫りたるも、たれども、準備未だ成らず。

のやうに、ともどもの代りにも、を用ひることもある。
たゞし、

給金は低きも(低くとも)、低けれども、應募者は多かるべし。

請願書は會議に付するも(付すとも)、これを朗讀せず。

のやうに、二様に解かれる場合には用ひない。(附録参照)

禁止の助詞

禁止の助詞

口語では、けれどけれどもとなつて、活用する語の終止形に結びついて、確定の條件を表す。

文語

汝はこゝに居るな。

みだりに人を笑ふな。

急ぎて事を仕損ずな。

口語

居るな。

笑ふな。

仕損ずるな。

右のやうに、文語の禁止の助詞のなは、ラ行變格活用動詞には連體形に、その他の動詞には終止形に結びつく。
口語の場合の用法も、文語の場合の用法と同じであるが、口語では、文語のラ行變格活用動詞は四段に活用する

疑問の助詞

から、口語の禁止の助詞のなは、すべての動詞の終止形に結びつく。

疑問の助詞

文語

口語

花ありや、なしや。

花あるか、なきか。

鹿の音を聞きたりや。

鹿の音を聞きたるか。

あるか、ないか。

聞いたか。

右のやうに、文語では、疑問のやは活用する語の終止形に、かは連體形に結びつくのが本則である。
たゞし、現代文では、やも連體形に結びつく。(附録参照)

口語では、かだけを用ひて疑問の意を表す。

甲乙 いづれをとるか。

答 幾何なるか。

汝は誰なるか。

右のやうに、いづれ、幾何、誰などの疑問の語が上にある場合には、かを用ひて文を結ぶのが本則である。
たゞし、現代文では、やで結ぶこともある。(附録参照)

反語の助詞

文語

口語

悔ゆともかひあらんや。

何をか隠さん。

そんなことがあるものか。

今日中に出来ますものか。

右のやうに、や・かはいづれも文の意味を轉じるものであるから、これを反語の助詞といふ。

口語では、かだけを用ひて反語の意を表す。

呼ぶとも應へんやは。

かゝるよき折またとあるべきかは。

右のやうに、や・かはも反語の助詞で、や・かよりは一層意味の強いものであるが、此等はともに文語特有のものである。

物事を列挙する助詞

物事を列挙する助詞

月と花とを賞す。

父と母とに相談します。

右のやうに、とは物事を列挙する助詞であるが、かやうな場合には、語句ごとにとを用ひるのが本則である。

たゞし、現代文では、誤解を生じない場合には、最後のとを略することが多い。例へば、

我は春と秋を好む。

三と四の和は七である。

のやうな文では、とを略しても誤解を生じない。しかし、地理と歴史の一部を復習しました。

のやうな文では、

地理の一部と歴史の一部とを復習しました。

地理の全部と歴史の一部とを復習しました。

言葉を言ひ
きる助詞

の二様に解せられるから、かやうな場合には、とを省略し
ない。(附録参照)

言葉を言ひきる助詞

我が軍大勝せりとの報あり。

見たことはないと答へました。

右の文のとは言葉を言ひきる場合に用ひられるもので、
活用する語の終止形に結びつくのが本則である。

たゞし、現代文では、

月出づると見えて……

嘲弄せらるゝと思ひて……

のやうに、連體形にも結びつく。(附録参照)

にとへの區
別

にとへの區別

東京に|行く。

前に|立つ。

東京へ|行く。

前へ|進め。

には動作の歸着する點を表し、へは動作の方角を表すも
のである。それゆゑ、東京にといへば、必ず東京に到着す
ることを表し、東京へといへば、東京の方角を表すだけで、
東京に行くも行かぬも不定である。

係結の助詞

係結の助詞

文 語

口 語

よくぞ歸りし。

心なん正しかりける。

夜や更けぬる。

汝は誰とか遊べる。

このたびこそは成功せ

め。

誰ぞ来てほしい。

何かありません。

ようこそ来て下さいまし

た。

右の文語のぞ・なん・や・か・こそは、いづれも文の結に關係を及ぼすものであるから、これを係結の助詞といふ。ぞ・なん・や・かが上にある時には、必ず連體形で文を結び、こそある時には、必ず已然形で文を結ぶべきである。口語では、右の下段の例のやうに、ぞ・か・こそなどを用ひて

だに・すら・さへの區別

も、文の結には何等の關係も及ぼさない。

注意 なん・やは文語特有の助詞である。

だに・すら・さへの區別

文語

陸地の片影だに見えず。

一錢だに與へられず。

禽獸すら恩を知る。

鳩にすら三枝の禮あり。

文語のだに・すらは、或物を擧げて他を類推させる意を表す。

口語では、文語のだに・すらに對して、さへでもを用ひる。

口語

陸地の片影さへ見えない。

一錢でもやられない。

禽獸さへ恩を知る。

鳩にでも三枝の禮がある。

文 語

雨降り、風さへ吹く。

暑さ烈しく、蚊さへ多し。

右のやうに、文語のさへは、あるが上になほ物の添ひ加はる意を表す。

口語では、文語のさへに對して、までを用ひる。

口 語

雨が降り、風まで吹く。

暑さが烈しく、蚊まで多い。

練 習

一次の文の傍線を施した助詞の用法を説明せよ。

イ日もはや暮れんとするに、時雨さへ打注ぐ。

ロ今宵こそは月見をしよう。

ハ富士山の高さは幾何なりや。

ニ來らば來れ、恐れんやは。

ホ樂があれば、必ず苦がある。

ヘ命を捨つとも、厭はじ。

ト食へども、その味を知らず。

二次の文の誤を正し、且その理由を述べよ。

イ學びてこそ人たるかひあらん。

ロ當日雨天なれば、順延と心得るべし。

ハ成績悪しとも、失望するに及ばじ。

ニ一分の時さへ空しく過すべからず。

ホ洋服地と帽子の見本を送れ。

第四編 文章

第一章 文及び文の成分

鳥 啼く。 風 吹く。
山 高し。 水 清し。

此等は、品詞編に述べたやうに、文法上、言語の単位として取扱はれるものであるから單語である。

鳥 啼く。
風 吹く。
山 高し。
水 清し。

文の成分

文

主語
述語

右は單語が集合して完結した一つの思想を表すもので、これを文といふ。

主語述語

右の文で、鳥、風、山、水はいづれも文の主題となり、啼く、吹く、高し、清しはいづれも主題の動作有様などを述べるものである。かやうに、文の主題となるものを主語といひ、主題について述べるものを述語といふ。

注意 述語は主題について説明するから説明語ともいふ。

星 稀なり。

平和は 來れり。

風ばかり 吹いてゐる。

右のやうに、主語は體言が單獨かまたは助詞と結びついたものから成る。

過ぎたるは 及ばざるが如し。

生れたのは 女の子です。

右のやうに、體言のやうに用ひられるものも主語となる。

人 來る。

花は 咲かざりき。

月が 出ましたね。

右のやうに、述語は用言が單獨かまたは助動詞や助詞と結びついたものから成る。

孔子は 聖人なり。

聲 雷の如し。

汝は 誰ぞ。

右のやうに、體言と助動詞や助詞と結びついたものも述語となる。

雨 降り來れり。

風も 吹さやみぬ。

鳥が 啼いてゐる。

右のやうに、動詞の重なつたものも述語となる。

太郎も次郎も 登校せり。

植物は 發生し成長し枯死す。

太郎も次郎も三郎も 運動し勉強する。

右のやうに、一つの文の中に、主語も述語も二つ若しくは二つ以上あることもある。

客語

犬 門を 守る。

子供が 笛を 吹く。

右の文の述語はいづれも他動詞であるから、門を、笛をのやうな目的語を入れねば、文の意味が完全にならない。

病は 口より 入る。

歳は 十五に なる。

右の文の述語はいづれも自動詞であるが、口より、十五にのやうに標準を表す語を入れねば、文の意味が完全にな

客語

らない。

右に述べたやうに、文の目的または標準を表す語を客語といふ。

客語は、前に挙げた例のやうに、主に體言に助詞をによりなどの結びついたものである。

馬(を) 繫ぐべからず。

樹木(を) 折り取るべからず。

右のやうに、客語は助詞をを省略することもある。

強いのは 弱いのを 苦しめる。

老人が 若いのに 扶けられる。

右のやうに、用言が體言のやうに用ひられて客語となる

こともある。

先生 生徒に 裁縫を 教ふ。

父が 子供に 名を 太郎と つけた。

右のやうに、文の性質によつては、客語が二つ若しくは二つ以上あることもある。

修飾語

水 甚だ清し。

面白い話が ある。

右の甚だは清しを修飾し、面白いは話を修飾する。かやうに、他の語を修飾するものを修飾語といふ。修飾語は主に次のやうなものから成る。

修飾語

一形容詞または形容詞のやうに用ひられるもの。

清き水 流る。

かゞやく入日 美しや。

これは 面白くない話だ。

これから東が あなたの屋敷です。

注意 右のやうに、體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふ

こともある。

二副詞または副詞のやうに用ひられるもの。

水勢 殊に激し。

英語を 怠らず學ぶべし。

雲は 墨のやうに黒い。

運動會が 昨日 ありました。

注意 右のやうに、體言以外のものを修飾するものを副詞的修飾語といふこともある。

右に述べた修飾語は極めて簡単なものばかりであるが、多くは次のやうに複雑なものである。

花を見る 人群集せり。

風頗る 烈しく吹けり。

私の家の前の櫻が非常に綺麗に咲いた。

接續語

我は地理及び歴史を好む。

接續語

私は東京へ行き、それから日光へ廻つた。
右の及びそれからのやうに、語句または文を接續するものを接續語といふ。

接續語は接續詞から成る。

獨立語

あはれ、今日も暮れぬ。

おい、兄さん、あなたも見物に行きますか。

右のあはれ、おい、兄さんのやうに、文の主要部から獨立する語を獨立語といふ。

獨立語は感動詞及び呼掛の語から成る。

以上述べた主語、述語、客語、修飾語、接續語、獨立語のやうに、

文の成分

文を構成する要素を文の成分といふ

練習

次の文を文の成分に分けよ。

- 一 春の花は恰も錦の如し。
- 二 婦人は家庭の改善に努力すべし。
- 三 校長は勤勉なる生徒を譽めたり。
- 四 お花やおまへはお菓子とそれから砂糖を買つておいで。
- 五 東京は賑かな都會だね。
- 六 紫式部は源氏物語を著した才女である。

第二章 節

文がその獨立を失つて、更に他の文の成分となるものを

節

節といふ。

歲月の流るゝは早し。

身體が良いのは頼もしい。

右のやうに、主語の地位にある節を主語節といふ。

瀬戸内海は波靜かなり。

松島は景色がよい。

右のやうに、述語の地位にある節を述語節といふ。

乗客は列車の來るを待てり。

聲は猫が鳴くのに似てゐる。

右のやうに、客語の地位にある節を客語節といふ。

學徳高き人は稀なり。

客語節

述語節

主語節

修飾節

春が来たが花が咲かない。
右の學徳高きは人を修飾し、春が来たがはその獨立を失つて下の文を修飾するものである。かやうな節を修飾節といふ。

夏は暑く、冬は寒し。

髪は亂れ、顔は青く、衣は破れてゐる。

右の傍線を施したものは、いづれも對立的に結びつくものである。かやうな節を對立節といふ。

對立節

練習

次の文を成分に分けよ。

一 良藥口に苦しとはよき諺なり。

二 姉は裁縫を好み、妹は音樂を好む。

三 鶴は首も長く、足も長い。

四 この會社は品行の正しい人を雇ひます。

五 困難な有様は盲人が杖を失つたと同じだ。

第三章 文の成分の倒置及び省略

前二章に説明した文の成分は、たゞ順序なしに排列されるものでなく、通常次のやうな一定の順序に従ふものである。

一 主語は述語の上に、述語は主語の下にある。
時は金なり。

飛行機主が飛んで述ゐる。

二客語は主語と述語との間にある。

兄主は陸軍大尉客となる。

父主は手紙客を子客に渡述せり。

三修飾語は被修飾語の上にある。

都會修の生活主は危険述なり。

私は大聲修で獨唱述します。

四接續語は接續すべき語・語句または文の間にある。

生徒主は國語客及び漢文客を學述べり。

彼は文主を學客び目武接を練客る。

五獨立語は主に文の首位にある。

文の成分の倒置

すは獨や、敵軍主寄せ來述る。
あれ獨、自動車主が來述た。

右の法則は、文の成分の通常的位置に關するものであるが、場合によつては、言葉の調子を整へ、または文の意味を強めるために、成分の位置を置き換へることがある。これを文の成分の倒置といふ。

一主語・述語の倒置

悠々一たるかな二天地一。

強一いです二ね、あなた一は。

二客語の倒置

何を一汝二は買三ひしぞ。

いくつになつたか、お前は。

三 修飾語の倒置

花も咲きけり、み吉野の。

私も驚きましたね、多少は。

四 獨立語の倒置

續け、ものども。

行きませう、さあ。

文の成分はいづれも文を構成する上に必要なものばかりであるが、これを省略しても誤解の生じない場合には、文を簡潔にしたりまたは語勢を強めるために、或成分または或成分の主要でない部分を省略することがある。これ

文の成分の省略

を文の成分の省略といふ。

一 主語述語の省略

(誰も)堤の上に登るべからず。

え、(私は)口惜しい。

いざ(貴殿は)こなたへ(入り給へ)。

兄は京都へ(行き)、弟は大阪へ行つた。

二 客語の省略

犯人は直ちに(警官に)捕縛せられたり。

私は入學を(學校長に)許可されました。

私は英語を少しも知りません。あなたは私に(それ

を)教へて下さいませんか。

右はいづれも文の或成分を省略したものであるが、この外に、次のやうに、二つ以上の成分または成分の主要でない部分を省略することもある。

敵軍來れり。(予は直ちに部下をして)(これを)攻撃せしむ。

私は父から立派な繪本を貰つた。それから妹も父から(立派な繪本を)貰つた。

右は二つ以上の成分を省略したもの がある。

樂は苦の種(なり)、苦は樂の種(なり)。

昔は昔(だ)、今は今(だ)。

右は成分の主要でない部分を省略したものである。

練習

一次の文の成分を通常的位置に置き換へよ。

イ 諸子の健康を余は切に祈る。

ロ 思はざりき、こゝにて君に逢はんとは。

ハ 雲のいづこに月宿るらん。

ニ ぞら、落ちた雷が。

ホ 苦の中に樂がある。

二次の文の省略された成分を補へ。

イ 堪忍は無事長久の基。

ロ 春は花をめで、秋は紅葉をあはれむ。

ハ こゝに馬繫ぐべからず。

ニ あなたはどちらへ。

ホ はい、東京まで。

第四章 文の組織上の種類

文をその組織上から分類すると、單文・複文・重文となる。

雨降る。

落花雪の如し。

生絲と茶とは我が國の重要な輸出品だ。

生徒は校則を守るべし。

英國民は實名を尊び、虚名を欲せず。

兄と弟とは國語と漢文とを某先生に學べり。

右のやうに、主語と述語との關係が、文法上の形式に於て、
たゞ一回だけ成立する文を單文といふ。

單文

彼は性質溫良なり。

生あるものは必ず滅す。

良藥口に苦しとは有名なる諺なり。

多くの人は己の愚なるを知らず。

物價が騰貴すると、細民が生活に困る。

右のやうに對立節以外の節を含む文を複文といふ。

天高く、地低し。

言ふは易く、行ふは難し。

月明かに(にて)にして、星稀なり。

砂は白く、松は青い。

木は倒れ、瓦は碎け、壁は落ち、家は傾いてゐる。

複文

重文

右のやうに、對立節を含む文を重文といふ。以上は單文・複文・重文の大要であるが、時には、此等が混合して、複雑な形をとることがある。次の例を見よ。

花咲き鳥啼く春は樂しきものなり。(重文を含む複文)

花咲く春は暖かく、雪降る冬は寒し。(複文が對立する重文)

花咲き鳥啼く春は樂しく、霜牙え雪

降る冬は寂し。(重文を含む複文が對立する重文)

練習

次の文を組織上から分類せよ。

一 氣候順調なりしかば、年も豊かなりき。

二 この庭は石燈籠の配置がうまい。

三 問ふは當座の耻にして、問はぬは一代の耻なり。

四 降り積る雪は北陸・山陰の地を銀世界にした。

五 停車場は、下りる人もあり、乗り込む人もあり、迎へに來た人もあり、

見送に來た人もあつて、非常に混雜してゐました。

第五章 文の性質上の種類

文をその性質上から分類すると、平敘文・疑問文・命令文・感歎文の四種となる。

健全なる精神は健全なる身體に宿る。

月は地球の周圍を廻轉す。

秋には人を壓しつけるやうな寂しさがある。

右のやうに、思想をすなほに敘述する文を平敘文といふ。

平敘文

疑問文

諸子は曾て文法を學びしことありやなしや。
空中を支配する時代も來りしにあらずや。
願つたら、先生が許して下さるでせうか。

右のやうに、疑問。または反語の意を表す文を疑問文といふ。

時のある時に時を得よ。

今日思考して明日語れ。

長いものには巻かれよ。

右のやうに、命令の意を表す文を命令文といふ。

今日九重に匂ひぬるかな。

世に處するもまた難いかな。

命令文

感歎文

あゝ、あつばれな勇士だ。

右のやうに、感歎の意を表す文を感歎文といふ。

練習

次の文を性質上から分類せよ。

一 汝若し幸運を望まば、自らこれを求めよ。

二 枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。

三 古より貞女は二夫にまみえずといはずや。

四 かく情ある人もありけるよ。

五 野分のあしたこそをかしけれ。

六 道路は左側を通行せらるべし。

七 午後の六時頃までには必ずいらつしやいませ。

八 試験もお蔭で都合よく済みました。

九運動部の委員には誰が適任でせう。

一〇まあ、この雨天によくいらつしやいましたこと。

女子現代日本文法終

附 録

文法上許容スベキ事項

(明治三十八年十二月二日
文部省告示第五十八號)

- 一「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ、金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フ

モ妨ナシ。

例

手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ、之

ニ從フモ妨ナシ。

例

罪サル。

評サル。

解釋サル。

七「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其ノ地位ニ安ズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカ

バ」ナドイフベキ場合ヲ、「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九 てにをはノ「ノ」ハ、動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨

ナシ。

例

花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ、動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨

ナシ。

例

有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ、母ニ似タルヤ。

一 一にてをばノ「トモ」ノ、動詞使役ノ助動詞、及び受身ノ助動詞ノ連體言

ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二にてをばノ「ト」ノ、動詞使役ノ助動詞、及び時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其ノ徳ヲ稱ヘケルトゾ。

一三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをばノ「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルト

キニ限り、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例

月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ、誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをばノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例

誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをは「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。
 期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。
 經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。
 誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(クレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」「トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

イハユル哺乳獸ナルモノ。
 顔回ナルモノアリ。

(をはり)

活用形	語	語	語	語	語	語	語	語	語
命令形	然形	連體形	終止形	連用形	未然形	活用形	活用名	命令形	然形
へ	れ	る	ぬ	きる	つる	ける	ふる	くる	する
へ	れ	ね	ぬれ	きり	つれ	けれ	ふれ	くれ	すれ
へ	れ	ね	ぬ	きよ	ちよ	けよ	へよ	こよ	せよ
四段	一段	一段	一段	一段	一段	一段	一段	一段	一段
縫	有	死	着	落	蹴	與	來	爲	爲
は	ら	な	き	ち	け	へ	こ	し	し
ひ	り	に	き	ち		へ	き	し	し
ふ	る	ぬ	きる	ちる	ける	へる	くる	する	する
ふ	る	ぬ	きる	ちる	ける	へる	くる	する	する
へ	れ	ね	きり	ちれ	けれ	へれ	くれ	すれ	すれ
へ	れ	ね	きよ	ちよ	けよ	へよ	こい	せよ	せよ

語

口

語

表用活詞動

活用名	四段	ラ行變格	ナ行變格	上一段	上二段	下一段	下二段	カ行三段	サ行三段
語	縫	有	死	着	落	蹴	與	來	爲
形未然	は	ら	な	き	ち	け	へ	こ	せ
形連用	ひ	り	に	き	ち	け	へ	き	し
形終止	ふ	り	ぬ	る	つ	ける	ふ	く	す
形連體	ふ	る	ぬ	きる	つる	ける	ふる	くる	する
形已然	へ	れ	ぬ	きれ	つれ	けれ	ふれ	くれ	すれ
形命令	へ	れ	ね	きよ	ちよ	けよ	へよ	こよ	せよ

文

語

活用名	四段	上一段	下一段	カ行三段	サ行三段
語	縫	有	死	着	落
形未然	は	ら	な	き	ち
形連用	ひ	り	に	き	ち
形終止	ふ	る	ぬ	きる	ちる
形連體	ふ	る	ぬ	きる	ちる
形已然	へ	れ	ぬ	きれ	ちれ
形命令	へ	れ	ね	きよ	ちよ

口

語

女子現代日本文法

一五 てにをは「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストドモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」「トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

イハユル哺乳獸ナルモノ。顔回ナルモノアリ。

(をばり)

一五 てにをは「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ、「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲労ノ狀アリ。誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例

イハユル哺乳獸ナルモノ。顔回ナルモノアリ。

(をばり)

文

語

活用名	縫	有	死	着	落	蹴	與	來	爲
形未然	は	ら	な	き	ち	け	へ	こ	せ
形連用	ひ	り	に	き	ち	け	へ	き	し
形終止	ふ	り	ぬ	る	つ	ける	ふ	く	す
形連體	ふ	る	ぬる	きる	つる	ける	ふる	くる	する
形已然	へ	れ	ぬれ	きれ	つれ	けれ	ふれ	くれ	すれ
形命令	へ	れ	ね	きよ	ちよ	けよ	へよ	こよ	せよ

口

語

活用名	縫	有	死	着	落	蹴	與	來	爲
形未然	は	ら	な	き	ち	け	へ	こ	しせ
形連用	ひ	り	に	き	ち	け	へ	き	し
形終止	ふ	る	ぬ	る	ちる	ける	へる	くる	する
形連體	ふ	る	ぬる	きる	ちる	ける	へる	くる	する
形已然	へ	れ	ね	きれ	ちれ	けれ	へれ	くれ	すれ
形命令	へ	れ	ね	きよ	ちよ	けよ	へよ	こい	せよ

口語助動詞活用表

特 殊 活 用										用 活 的 詞 動			用 活 的 詞 容 形		活 用 の 種 類		
比 較	打 消	指 定	推 量	推 量	時 間	時 間	敬 語	希 望	推 量	打 消	敬 語	使 役	敬 可 受		詞 動 活 用 形 類	活 用 形 類	
													身 能	語 能			
やうでせ	やうだ	なから	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	未然形
やうだ	やうだつ	なかつ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	連用形
やうだ	やうだ	ぬ(ん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	終止形
○	○	ぬ(ん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	連體形
○	○	ね	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	已然形
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	命令形
連體形(用言の)		未然形(動詞の)		連體形(直接または助詞を隔てて)		終止形(四段の動詞の)		未然形(四段以外の動詞の)		連用形(動詞の)		連用形(動詞の)		連用形(動詞の)		用言との連続	

注意

一 括弧を施したものは、そのいづれを使用してもよい。
 二 指定、打消、比較などの助動詞は、未然形に「連用形にたを連ねると、容易に理解することが出来る。

Handwritten table on the right page, likely a continuation of the grammar notes or a practice grid. It contains faint, illegible text and a grid structure.

新書簡便書目

活字印刷	新書簡便書目		新書簡便書目		新書簡便書目		新書簡便書目	
	發行所	書名	發行所	書名	發行所	書名	發行所	書名
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法
	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法	東京開成館	女子現代日本文法

114 115 116

大正十三年度臨時定價
金七十二錢

大正十一年十一月十六日
大正十二年十一月十四日
大正十三年十二月三日
印刷發行
訂正再版發行

著者 所有權



著者 東京開成館編輯所
發行所 東京開成館
印刷者 東京開成館

東京開成館編輯所
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
株式會社 東京開成館
代表者 渡邊良助
大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角
三木佐助
東京市日本橋區數寄屋町九番地
林平次郎

發行所

東京市小石川區小日向水道町八四
振替貯金口座東京第五參貳貳番

株式會社 **東京開成館**

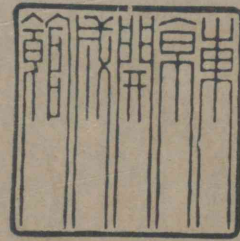
女子現代日本文法
定價金四拾錢

第二十卷

新庄育等女學校

三年 三二春 野

150



庫
23
746

広島大学図書

2000041746